

## ■現状-2・低迷の理由

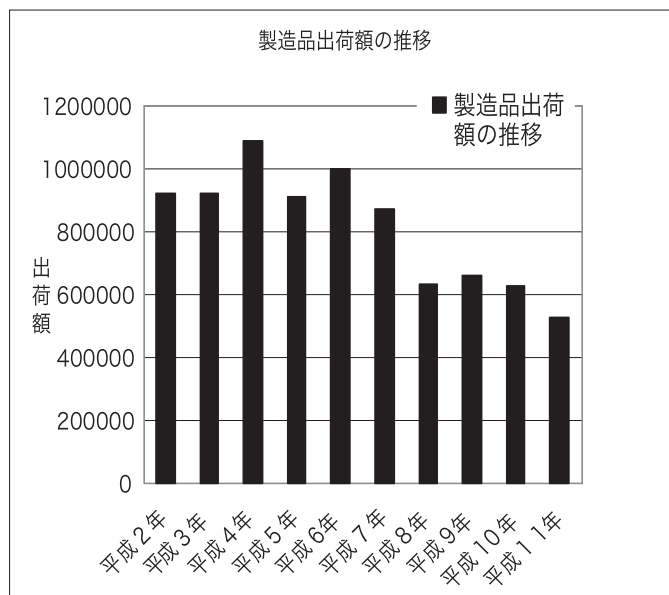
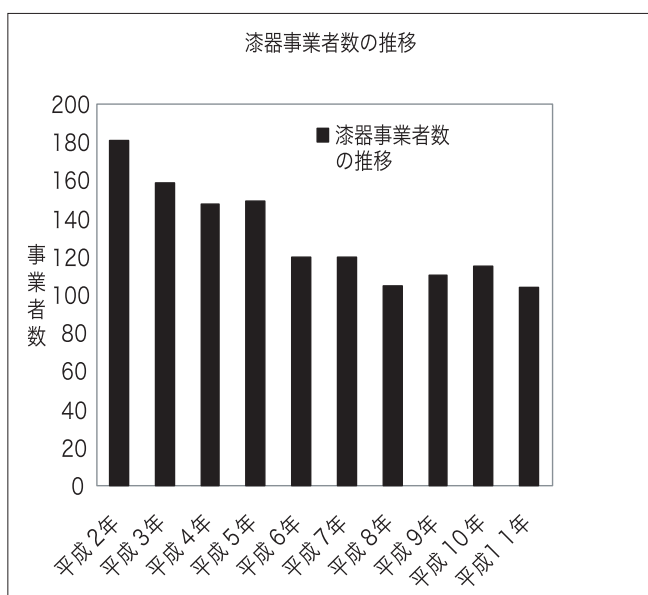
会津漆器は一部の美術工芸品を除けば、椀・菓子鉢・盆などの暮らしに密着した庶民型の漆器が多いといわれます。一方で重箱や屠蘇器などといった季節限定商品も主力とされてきており、年に一度、使うか使わないか、ましてやライフスタイルの変化にともない、需要が薄れてきているものが多くあります。原材料不足やコストを下げるため、どの産地においても樹脂製品に化学塗料の吹付塗装という合成漆器の生産が増加しましたが、高度成長期が終わる頃から、こういったプラスチック漆器の分野にも外国の廉価な製品の輸入が続いており生産高は頭打ちとなっています。また、こうした廉価な製品と本格的な漆器製品の違いが曖昧な表示などにより、漆器そのものの価値が低く見られる傾向も否めません。

近年では漆器に、実用性がありながら、手工芸的な味わいを付加価値として求める傾向にあり、これはむしろ多品種少量生産の伝統的生産形態に回帰するものです。しかし、合成樹脂の場合、金型による生産であるため大量生産でなければ採算がとれず、現状脱皮を困難にしているとも言えます。

会津漆器は全国の漆器産地と同様に、ピーク時の1980年から2000年までをみると、事業所700社から280社（60%減）へ、従業員3,400人から1,400人（58.8%減）へ、出荷額160億円から75億円（53.2%減）へ落ち込んでいます。

※会津漆器協同組合などによると、2004年の出荷額は71億円。  
就業人口も30年前の3分の1以下の1,115人に減っています。

- ライフスタイルの変化
- 百貨店・ギフト市場への出荷減少
- グローバル経済による輸入品との価格競争
- 原材料の安定確保が困難
- 産地生産者と顧客の隔たり（消費者ニーズと製品のズレ）
- 漆器は低商品回転率
- PR不足
- 後継者不足など



福島県の漆器製造業（資料：県工業統計調査）